私にとっての靖國神社
―ジブチから「平和の社」を再考する―

大塚海夫（おおつかうみお）
（前ジブチ共和国駐箚特命全権大使）

執筆者紹介
昭和35年生まれ。防衛大学校、ジョンズ・ホプキンズ大学高等国際問題研究大学院卒。元海将。防衛省情報本部長、伊藤忠商事参与、英国王立防衛安全保障研究所特別名誉フェロー等を経て、初の自衛官出身大使としてジブチで勤務した。

九段に所在し、フランスのカトリック修道会が創建した暁星小・中・高校で学んだ私にとって、靖國神社は九段下駅から学校に行く途上の日常風景に在る神社だった。その後、防衛大学校から海上自衛隊に進む過程でプロとして「死生観」と向き合うことになり、戦場に赴く者の心理、命の危険を前提とする人生、そして部下にそれを強いる責任について真剣に考える立場に立つこととなる。アフガン・イラク戦争に際し、米中央軍司令部へ派遣されたが、戦死者の棺が後送される度に催行される慰霊祭に幾度となく臨むことで、軍人にとっての死が真に身近なものとして感じられるようになった。

帰国後、靖國神社の崇敬奉賛会会員になった。国の為に散華された英霊の御心について深く考えるほどに、今日、日本が存在していられること自体、明治維新以降の英霊の尊い献身無くしてはあり得ないとの確信が、英霊に対する感謝の念を深めた。また、英霊の遺書を拝読するほどに、士官、下士卒を問わず、従容として戦場に赴いたのは、眼前にある祖国の危機を打開しようとしたことはもとより、次の世代の日本が平和であることを強く願っていた故の振舞だと感じた。次の世代に絆を繋ぐという思いが、戦場で一身を捧げることをも覚悟させたのだとの理解である。その、「次の世代」であり、国防という点で英霊の御心を最も理解できるはずの我々こそが、英霊の思いに感謝すると同時に、その思いを受け継ぎ、日本の平和のために尽力すべきとの信念が湧いた。

責任ある立場で外国軍人と接する機会が増えると、日本の「軍人魂」についてきちんと説明する必要が生じ、多くの外国人を靖國神社に連れて行った。どこの国の軍人でも、到着殿で宮司の説明を拝聴し本殿で参拝すると、一様にその空気に圧倒され畏怖の念を抱き、日本滞在で最高の経験だと口にするのが常であった。英霊に近い立場にある世界の軍人達は皆、靖國神社の意義をよく理解し、祖国のために命を捧げた英霊に最大限の敬意を表する。そこには、いわゆる「戦犯」への違和感はなかった。旧連合国軍人でさえ、「戦犯」が政治的犠牲者であることに理解を示した。将官となり、より広範に海外の賓客を迎える立場に立ってからは、相当な人数の軍の高官、また、駐日大使を靖國神社の日々のお祀りである朝御饌祭にお連れした。靖國神社は不幸にして「政治化」された面があり、「外交的配慮」から、軍人、外交官が表立って参拝しないことにしている国がある。そのような国の要人に対しては、神社のご配慮で静かに参拝できる環境を整えていただきつつ靖國神社の紹介を続けた。戦争は政治の延長と言われる。しかし、世界の軍人達との交わりが教えてくれたのは、戦没者の慰霊顕彰を政争、外交の具にしてはならないということだ。国家に殉じた英霊を静謐な環境でお祀りし、その偉業に対し感謝し続けることは、後世の国民の務めであり、それがグローバルな常識であって、世界共通の価値基準でもあると言ってよい。

さて、41年間の自衛隊での人生を終えた私は、縁あって、駐ジブチ大使として再度、国家に奉仕する機会をいただいた。特命全権大使は、天皇陛下から認証いただき、任国において日本を代表する立場にある。私は愛国者のつもりだが、パトリオットであって、ナショナリストでもショービニストでもない。愛国心は寛容の心と一体であるべきで、我が日本をこよなく愛し誇りに思うが、他国の人もまた自国に対して同じ思いを持つことは当たり前だと考えている。

日本に対する世界の関心は高い。

そして、日本に対する評価は、多くの分野で日本人が思う以上に驚くほど高い。私が話をした外国人の多くは、日本が行きたい国リストの上位にあると言った。そして、日本を訪れた人は異口同音に、日本の治安の良さ、日本人の誠意、礼節、思いやりに感銘を受けている。また、東日本大震災を知る人にとって、日本国民の秩序立った行動は賞賛の的である。世界は日本に惹かれているのだ。日本は世界の憧れなのだ。これこそが、英霊が命を賭けて次世代に継承しようとした日本の姿なのだと思う。

日本の国柄を語る際、今上陛下が126代の天皇という事実だけで、世界中の誰もが度肝を抜かれる。その脈々と続く日本の歴史の中で、長く平和が続いたことを知ると更に驚く。平安時代、江戸時代はもちろん、戦後の約80年間でさえ、平和の継続は世界で希有な例だ。ジブチで出会ったフランス人考古学者に啓発され、一時帰国時に縄文時代の三内丸山遺跡を訪ねて驚いたのは、今から五千年も前に、「平和な文明」がなんと千七百年ほども続いていた事実だ。千七百年間といえば、古墳時代以前から現在に至る、本邦有史の全期間以上に相当する。また、縄文時代は、神話世界の物語ではなく、考古学により、一万年以上も続いていたことが科学的に証明されている。日本の平和は、国家国民のDNAレベルで身に染みついたものなのだ。

四季に恵まれた豊かな自然を背景とし、長期に亘る平和を基調とする環境が育んだ穏やかで争わない国民性が、個人レベルでの思いやり、共同体レベルでの共存共栄、常にウィンウィンの関係を前提とする道徳観に至り、「惟神の道」となって神道に繋がるのだと気付かされた。現代欧州の知性と呼ばれるジャック・アタリは、これからの時代は利他主義に基づく社会が求められると言い、日本がその手本だと語る。その利他主義をもたらした日本の道徳観の源泉が、長期にわたる平和な環境の生み出した「自然道」なのだろう。外国人に日本文化を語る中で、「神道」の根本理念である「自然への畏敬」は、唯一神を崇めるキリスト教徒、また、イスラム教徒にも十分に理解の得られるものであることがよく分かった。世界的に環境問題が重視されて「エコ」であることが求められるようになり、また、SDGsに象徴されるように、持続性なくして人類の発展なしということが世界の常識になりつつある現在、「自然道」である神道の思想は世界的に受容可能なものであると確信するようになった。

私は40年にわたり安全保障を生業としてきたが、平和は多大な努力と、時には犠牲の上に創出するものであり、タダでは獲得できない。ジブチという国は小国ながら、国内外での騒乱に翻弄される大国に囲まれるなかで、唯一、域内で平和と安定を享受する希有な国だ。その陰では、米中という対立する2大国の基地を狭い国内に誘致しバランスさせ、隣接する「万年紛争国」ソマリアへ、十年以上にわたり常時、国軍の四分の一の兵力を平和維持活動のために派出し、60名を越す死者を出すという、文字通り血の滲む努力をしている。

世界を見渡したとき、平和を基調とする日々を送れる国は多くない。私は「日本特殊論」は嫌いだが、平和という点で、明らかに日本は世界の中で特殊な国だ。日本人は平和「ボケ」しているという人がいるが、「ボケ」ているのではなく、そもそも世界の常識と基準が「ズレ」ているのだ。四面環海の環境に守られてきた日本は、歴史上、他国に蹂躙されて国が無くなるような経験をすることなく平和を享受してこられた。しかし、世界は交通手段の発達により時間的に狭くなり、近年、サイバー空間の登場で、空間的にも距離感が縮まった。米国の一強体制も変化している。世界が時間的、空間的に狭くなった今日、もはや日本が従来の平和「ズレ」に安住することは許されず、現実を直視し、平和は力によって産み出されるという、世界の常識を受入れなければ生き残れない。他方で、世界が狭くなり、共存共栄がますます重要になるなか、世界平和のために、「利他主義の国、日本」が果たす役割はますます大きくなるだろう。

靖國神社を参拝する度に、紛争が常態化するアフリカ大陸での勤務を経た私の胸に去来するのは、英霊の御心である平和国家日本を次世代に継承するという縦軸と、国際社会に誇れる我が国の平和観、道徳観を世界に伝えるという横軸の中心に在るのが、「平和の社」靖國神社だという思いである。